

ピエゾサージェリーと内視鏡がもたらした低侵襲治療

昭和大学歯学部顎口腔疾患制御外科学講座

朽名智彦 Tomohiko Kutsuna

新谷 悟 Satoru Shintani

はじめに

内視鏡下手術は、入院期間の短縮、出血量の低減など患者にとって低侵襲の手術であることから、医科領域では呼吸器外科、消化器外科、泌尿器科、耳鼻咽喉科など多数の分野の手術に応用されています。しかし、内視鏡下で特殊な器具を用いて行う手術であるため、高度な技術と経験が要求されます¹⁾。また、手術に伴う医療事故も報道されています。

歯科あるいは口腔外科領域も例外ではなく、顎下腺唾石摘出術²⁾、顎骨骨折における観血的整復固定術³⁾、顎関節疾患の治療⁴⁾などにおいては、すでに内視鏡手術が応用されており、低侵襲で安全な手術手技が確立されつつあります (図1)。

一方、超音波骨切削機器 (ピエゾサージェリー[®]; mectron 社) は、軟組織を損傷することなく硬組織の切削が可能であることから、神経周囲の骨切削などに脳神経外科領域や整形外科領域で使用されています^{5,6)}。近年、歯科口腔外科領域においても、顎変



図1 内視鏡手術と硬性内視鏡 (HOPKINS[®] Telescopes, Karl Storz 社)